

産官学連携センター
教授 澤田 芳郎

映像制作論

*本年度不開講

1. 授業の概要

デジタルビデオカメラや映像編集ソフト、著作権フリー音源などの普及に伴い、映像作品が手軽に制作できるようになりました。しかし日常的なコミュニケーションシジョンにおいて映像が持つ意味を理解し、表現方法として自分のものにするには、必ずしも容易ではありません。では実際に映像作品を制作し、それを通して自らコミュニケーションの拡張を試みる授業があってもいいのではないかと。そのようなねらいで筆者が設けている全学共通科目が「映像制作論」です。

筆者は「教員ポストで雇用された産学連携コーディネータ」として産官学連携センターに勤務していますが、他大学の文系教員だったころ、学術ビデオのプロデュースやシナリオ作成、就職ガイダンスのビデオ化、テレビの科学番組のためのリサーチに従事しました。プロとも言えないのですが、映像作品の制作に関与した経験は大学教員としては多い方でしょう。たまたまですが、劇映画のシナリオ開発に参加したこともあります。

授業では以上をふまえ、まず企画・構成(シナリオ作成)、撮影、編集、上映という作品制作の手順を示します。そして授業の過去作品を上映し、監督らとの質疑応答によって制作のコツを探ります。そのうえで受講者を数名ずつグループ編成し、カメラや映像編集用パソコンを貸与して、各班30分前後

の「他人に見せることを意識した作品」を作ってもらいます。後半の授業では班ごとの進行状況報告のほか、映像業界からゲスト講師を迎え、制作プロセスの詳細やテレビ業界をめぐる社会的文脈に理解を深めます。

2. 代表的作品

この授業は二〇二〇年度にポケゼミとして設置し、その後A群科目に移しました。実は筆者自身の制作経験は研究成果のプロモーションビデオの製作が一本、映像教材の企画・構成、編集が各一本、そして自分の所属部署の紹介ビデオの構成・撮影・編集が一本だけなので、作品の自身に踏み込んだ指導は原則行いません。しかしそれも功を奏してか、学生たちは熱心に取り組めます。現在までに制作された作品は約五〇本。友情や恋愛を描いた青春ドラマ、ばかばかしくも楽しいバラエティ、デジタル処理駆使の抽象作品、人物に密着したドキュメンタリーなどができています。代表的な作品は次のとおりです。

●青春ケッタマシン

(田中葉子脚本・監督、二〇二〇年18分)
友人と喧嘩した女子学生。トランペットを吹きに出かけた鴨川からの帰途、男子学生と衝突して自転車壊れ、彼に送られて帰宅するが、その様子を見ていたのは彼女に思いを寄せる別の男子学生だった。彼女をあきらめようと、友人と大文字山に向かったその学生は……。

「ケッタマシン」は自転車を意味する愛知県三河地方の方言。

●それでもカメラは回っている

(小林由布子脚本・監督、二〇〇七年49分)
「映像制作論」の作品制作に取り組む学生グループ。やっとできた鹿島君の脚本は冗長だった。ハシカで休んだ鹿島君をよそに、小林監督と仲間たちは脚本を変更して撮影を始める。ある女子学生を好きになった男子学生は交際に持ち込むことに成功するが、しかし行き詰まった物語を打開できるのは鹿島君だけだった……。作品世界と作品を作る学生グループの世界が交互に進行するメタ映画。第10回宝塚映画祭で上映。



方でドラマもドキュメンタリーもリーダーの個性あつてこそ作品としてのまとまりが得られます。これはバランスが難しいところで、教員として班の分裂を促すこともありですが、オムニバス形式すなわちメンバーそれぞれが監督を務める短い作品を複数制作するという形で解決することもあります。

●Crank Up and Tramp Up

(川原悠三宅陽介脚本・玉木青監督、二〇〇九年30分)
「映像制作論」は受講希望者が多く、例年三倍程度の抽選になるようです。対象として想定しているのはまったくの初心者で、プロを目指して勉強中の人には向きませんが、受講経験や制作した作品を手がかりとしてその道に進む人がごく少数いることも事実です。またプロにならなくても、映画やテレビの見方が明らかに変わります。全学共通科目で映像制作を指導される同志教員の方が、あと何名かおられないものでしょうか。



いきなり始まるインタビュー。それは戦隊シリーズの若手プロデューサーにシリーズの趣旨や製作上の工夫を問うものだった。場面は変わって制作グループの会議。今年の課題が戦争をテーマにしたドキュメンタリーだったことを思い出した学生たちは、激しい議論の末、再編集に取り組むことにした。そうして出来た作品は……。タイトルの「Crank Up」は撮影終了、「Tramp Up」は捏造の意。

●ランディ・チャネル、道を求めて

(山中一毅監督、二〇〇四年30分)
カナダ出身の茶道家ランディ・チャネル氏。カメラは裏千家準教授であるチャネル氏の日常と教授風景に密着し、その人柄と茶道観に迫る。武道を経て茶道に進んだチャネル氏が長年追い求める「道(タオ)」とは……。



3. 考察

映像は意外に難しい表現手法です。意図したことが伝わらなかつたり、意図しないことが伝わったり……。言葉で表現できないことも表現できますが、逆に言えば映像は「こまかしの方法」ということであり、作る側の倫理が問わ

れます。受講者にはグループで制作する映像作品以外に課す個人レポートでこのあたりを考察してもらいますが、しかし若い世代は総じてこの問題を軽々とクリアしていきます。おそらくは間もなく、インターネットも前提に、個人レベルの「映像コミュニケーション」が定着した社会になるでしょう。一方、受講者の作品制作に関わっているうちにわかってきたことがあります。それは第一に映像作品は観客のイメージレーションを喚起する装置だということ、第二にそのイメージレーションをうまく収容できればおもしろいと思ってもらえること。映像作品はそういう意味の相互作用において成り立つものであり、だからストレートに主張だけを訴えても観客には届きません。まず映像作品として観客に受け入れられてこそ、テーマも訴求できるのです。それはドラマもドキュメンタリーも同じ。このあたりは19世紀末〜20世紀初頭に映画という表現形式が誕生して以来、変わらない部分でしょう。

作品制作の手順はさまざまです。班内の役割分担は必須ながら、リーダーがグループ内の議論を促進し、ドラマの場合はその成果を取り入れてシナリオが作れば、一般に作品の質が上がります。また参加者の満足度も高くなります。ドキュメンタリーの場合は撮影計画やおまかな構成に加えて撮影後の「再構成」が重要で、これも力を合わせて取り組んでほしいところですが、一



澤田 芳郎 (さわだ よしろう)
1954年大阪府生まれ。
産官学連携センター 教授(執筆時)
専門は科学社会学、産学連携論。近年関わった書籍に「小松左京自伝」(2008、小松左京氏へのインタビューを担当)、DVDブック「カラコルム/花嫁の峰チョコリザ」(2010、資料収集を含む関連コーディネートを担当)がある。2010年4月、小樽商科大学ビジネス創造センター教授に異動。